

工場からの失火により本堂・書院を焼失した（『東京朝日新聞』明治二十七年九月十四日）。残念なことであるが、そのほかの諸堂は現在も残り祐天の遺徳を偲ばせている。

第二項 庶民の救済

祐天は苦しむ農民を取り締まる立場にあった、いわば中間管理職の家に生まれたのではないかと推定した。また親類に出家者も多かった。そんな中で伯父や両親の言葉に耳を傾け、純粋な気持ちで出家したのではなからうか。すなわち、漠然とながらも苦しんでいる人々を救えるような立派な僧となるようにと言われていたことであろう。出家してからは、ひたすら檀越上人を師と仰ぎ、臨終のときまで離れることはなかった。臨終のときは独り祈祷室にこもって念仏したぐらいの一本気な性格だった。そして、医者も十分に人を救えない時代、まして田舎にどれほどの医者がいたであろうか。現実には苦しんでいる人が寺の門戸をたたき相談にきたに違いない。隨身として檀林で勉強を進めていた祐天ではあったが、現実には人を救わなければ何にもならないと考えていたのであろう。その証拠には、累得脱の話にしても、檀林には大勢の僧侶がいたことには間違いない。そんな中なぜ隨身の祐天が出かけていったのか。むしろその檀林の末寺の所化がいたのであるから、近所の出家僧が頼まれて当然ではなかったのか。しかし、現実には祐天が出かけ救済を果たしたのである。祐天は黙って見

ていられなかつたのであろうし、もし自分にそれができなくては僧侶になる意味がないと考
えたのであろう。そうでなければ、たとえ出世争いに負けたとしてもすぐに隱遁を決意する
とは思えない。二臘席まで上りいよいよというときに増上寺を捨てたのは、やはり民衆との
接点を保ち続けたかつたと考えられるのである。牛島時代の話は今のところ『利益記』ぐら
いしか史料はないが、困っている人がいればどこへでも出かけていく姿勢が読み取れ、この
考えを裏付けているであろう。そして綱吉との法門とは違つて知識を説明するのではなく、
いっさい難しいことは言わずに、自ら信じ自ら行じることの大切さ、誠の心で念仏する大切
さを説き、祐天が自分で回向して帰ってくるのではなく、必ず相談にきた人に念仏させまた
勧めている状況が『利益記』に見て取れるのである。

さすがの祐天も、綱吉に念仏信仰を納得させ、念仏は民衆の唱えものという觀念を家康公
の話から改めさせることはできても、その信仰に引き込むことはできなかった。しかし、そ
の法門と一緒に聞いていたと思われる家宣や大奥の人々、代が替わつて吉宗に至るまで念仏
門の信者にとどめたのは祐天の功績であると言つても過言ではない。

しかし、祐天はどんなに位が上がつても決して庶民との接点を断ち切ることはなかつた。
むしろ本当の隱居生活に入つてからまた再び庶民との結縁の場を持たたことを喜んだことであ
らう。それは晩年にも名号を書写し続けたことから推察されるのである。

そして何よりも偉大なことは、祐天没後においても多くの書写された名号や遺跡寺院を通

して念仏の信仰が保たれているということである。それが最も大きな祐天の行蹟と言えるであろうし、それこそが祐天の目指したものであると言えるのである。

おわりに

祐天を浄土宗の立場からその伝記と足跡の解明を試みた。おそらく、初めてのことであろう。もちろん、「普及本」の立場から祐天を見た先生あるいは国文学者などの人々は大勢いた。しかし、祐天は決して霊能力者ではなく、一人の凡夫でなければ浄土宗の僧侶とは言えないのである。

以前私はある人に、祐天のその超人的な人格はそのままにしておいたほうが民衆の信仰を集めやすいと忠告されたことがある。しかし、現代の科学的合理的教育を受けた私には、まず解^げ信^{しん}しなければ本当の信仰に入れなかったのである。したがって、祐天が本当に霊能力者であったり、また不動明王から智慧を授かったような人であっては、仏教を信じ浄土教を信じてきた私にとっては、聖書に書かれた神を信じるのと同じぐらいの不合理さを求められるのである。したがって私にとっての祐天はあくまでも人間であり、凡夫であり浄土を信じひ